

解題：プラネタリー・アーバニゼーションをめぐって

原口剛*・平田周**

Takeshi HARAGUCHI and Shu HIRATA
On Planetary Urbanization

1. 地理思想の現在——本企画の意図

地理思想は、過去50年のあいだにめまぐるしく転回してきた。1950年代から60年代にかけての計量革命、地理学に人間の身体を取り戻そうとした人文主義地理学・現象学的地理学、公民権運動やベトナム反戦運動のうねりのなかで生み出されたラディカル地理学（主としてマルクス主義地理学）。さらには、ジェンダーやセクシャリティの問いを切り開いたフェミニスト地理学、ポストコロニアル理論を吸収した「新しい文化地理学」、文化論的転回そしてポストモダン地理学などが、地理思想の転回によって生み出されたものとして挙げられよう。こうした歴史を振り返れば、地理思想は、自らの学問的営為のみならず、様々な出来事やそこから生まれた多様な実践、そして他分野における理論的展開に触発されながら、発展してきたと言える。

これら幾重もの転回をへた2010年代以降の地理思想は、世界的に新たな局面に突入しているように思われる。だが、これらの理論的な布置を概観するような作業は、国内ではまだ始まっていない。本企画は、地理思想の現代的展開を地図化しようとする試みの最初の一歩である。そのために、本企画が取り上げたのは、アンディ・メリフィールドやニール・ブレナーがアンリ・ルフェーヴルの『都市革命』における議論に依拠しながら、発展させた「プラネタリー・アーバニゼーション [地球の都市化]」という問題設定、およびそれをめぐる議論である。具体的には、ここで訳出した4本の論考はすべて、ブレナーが編纂した論集 *Implosions / Explosions: Towards a Study of Planetary Urbanization*, (Berlin: Jovis Velag GmbH, 2014.) に収録されたものでもある。なかには再度別の著作で加筆修正されたものもあるが、訳出にあたっては現時点での最新版を用いることを基

本とした。

「プラネタリー・アーバニゼーション」という問題設定は、ルフェーヴル受容や解釈の歴史にも関わる。そこで本解題ではまず、この問題設定の背景説明をも交えながら、ルフェーヴル受容史を大まかに3つの時期に分けて概観する。次にここで訳出した諸論考をひとつのまとまりとして概説する。ただし、あくまで以下の解題は、読者をそれぞれの論考へと誘うための見取り図でしかない。それを提示することで、ある程度議論の全体を見渡すことができるようにしたいと思う。他方でこのような見取り図は、議論を図式化してしまう危険と表裏一体でもある。だから読者諸氏には、この解題の枠組みに縛られすぎることなく、各論文に張り巡らされた幾重もの思考の線を、自由に読解してもらいたい。

2. ルフェーヴル受容略史

第1期は、1960年代から70年代の時期であり、同時代的なルフェーヴル解釈の時期である。それは、まさにルフェーヴルが日常生活批判を経て『都市革命』(1970年)や『空間の生産』(1974年)に結実することとなる都市論へと向かいつつあり、デヴィッド・ハーヴェイが『都市と社会的不平等』(1973年)の執筆に取り組んでいた時期である。ハーヴェイは、この時期にルフェーヴルの研究に対する賛意と批判を交えながらも、現在まで続く理論的な対話を開始したのであった。

第2期は、1990年代以降、とりわけ1991年に『空間の生産』が英訳されたことを契機として始まる。空間論的転回・文化論的転回が勢いを増していたこの時期には、とりわけルフェーヴルの都市論の文化論的側面に焦点があてられた。たとえば「ヘテロト

* 神戸大学
** 南山大学

ピー」概念は、フーコーの「ヘテロトピア」概念と並んで、この時期の地理思想を大いに刺激した。また、「表象の空間・空間の表象・空間的实践」という三元的弁証法もそうである。この時期の代表的なルフェーヴルの読み手として、エドワード・ソジャが挙げられるだろう。ソジャの著書の題名『ポストモダン地理学』が示すとおり、ソジャは、地理学が、モダンの時代に支配的であった歴史学に対して、独自の社会批判の役割を担うということを宣言したのであった。しかし「ポストモダンの転回」は、すでにひとまわりしてしまっただけのように思われる。

2010年代の現在、ルフェーヴルの読解は第3期をむかえつつある。それは一方ではルフェーヴル思想に内在した理論的研究の進展によるものであり、とりわけ『空間の生産』以後に、ルフェーヴルが出版した4巻にわたる著作『国家について』(1976-1978年)の読解に基づくものである。こうした研究成果の中でも特筆すべきものとして、スチュアート・エルデンとニール・ブレナーによって編纂されたルフェーヴル国家論の翻訳の抜粋集*State, Space, World* (Mineapolis: University of Minnesota Press, 2009.)が挙げられるだろう。この著作に関しては、編者による序文も参照してほしい。他方でこうしたルフェーヴル読解の流れから、「スケール」論を取り上げ、グローバル化研究における国家の位置づけを問い直す一連の研究で一躍脚光を浴びたのが、ニール・ブレナーであった。

こうした読解の方向性は、もちろん、現在の状況と無関係ではない。そこには、2000年代に勢いを増した新自由主義の問い直し、なにより2008年代の金融危機以降の時代にあって、資本主義の空間的動態をいかに把握するのかという問題意識が基盤となっている。また、オキュパイ運動をはじめとする、反グローバル資本主義の闘争への連帯意識やそこで生まれた論争状況への介入に裏づけされている。つまり、ここで問題になっているのは資本主義の(再)解読であり、それに対するオルタナティブな理論や想像力を描き出すことである。

注目すべきは、その理論的な裾野が第1期よりもずっと広いことだ。たとえば、ルフェーヴルやハーヴェイがマルクスの理論を再読し、その潜在性を探っていた時期には、イタリアの思想家たちがマルクスを「政治的に読む」ことにより、オペライズモやアウトノミアの理論的地平を切り開こうとしていた。けれども、少なくとも90年代までは、これらの思想的潮流が交わることはなかった。しかし2000年代以降、ハーヴェイがネグリらの著作に応答し、ま

たネグリらも大都市に議論を差し向けようとするなかで、新たな議論の舞台が生み出されようとしている。これらの点については、後出のネグリのインタビューおよびそれに付された北川による解題論文を参照してほしい。

以上のような時代背景のなかで、第3期のルフェーヴル読解は進められている。そのなかでキー概念として浮上しているのが、「プラネタリー・アーバニゼーション」であり、その代表的理論家がメリフィールドとブレナーである。

ブレナーについてはすでに触れたが、ここで、アンディ・メリフィールドに関する説明を手短かに補足しておきたい。みづから自立研究者independent scholarを名乗る彼は、デヴィッド・ハーヴェイの理論を独自に受け継ぎつつ地理学者・空間論者として活躍し、すでに1990年代にはルフェーヴル読解をつうじて独自の空間論を構築していた。たとえば1993年に*Transactions of the Institute of British Geographers, New Series* (Vol. 18, No. 4, 1993, pp.516-53)に掲載された論文'Place and Space: A Lefebvrian Reconciliation'は、ニコラス・エントリキンNicholas Entrikinによる「空間/場所」論を批判的に検証するとともに、ルフェーヴルの三元的弁証法を活用することでマルクス主義的な視点から「空間/場所」を再概念化しようとする、意欲的な試みだった。以後メリフィールドは数々の刺激的な都市論を公表しつづけてきたが、とりわけ近年は*The Politics of the Encounter: Urban Theory and Protest under Planetary Urbanization* (University of Georgia Press, 2013) や*The New Urban Question* (Pluto Press, 2014) など、現代の都市論に対し重要な問題提起をおこなっている。なお本誌掲載論文は、もともと*City*の15巻(2011年)に公表されたものであるが、冒頭で触れたようにブレナー編による著作*Implosions/Explosions*の第31章として再録されている。

3. 地球のスケールに広がる都市化の影響

「都市のプロブレマティックは世界的なものである。(中略)都市社会は地球的なものとしてしか定義できないのである。実質的に、都市社会が全地球を覆う」(今井成美訳『都市革命』晶文社、1974年、207頁)。この文言が、「都市的なものの地球化」(本誌掲載論文「地球の変貌」)という言葉によって手短かに要約される。ルフェーヴルが把握しようとしていた社会状況は、カール・ポランニーの言葉をパラフ

レーズすることで、次のようにも表現できるだろう。伝統的に都市の中に「埋め込まれていた」産業活動は「脱埋め込み化」され、かつての都市（やそこで営まれていた生活様式）は破壊の対象となり、今や都市は産業活動によって絶えず造型され続けることで、都市的なものを行政的な区割りや国境を超えて伝播させた。その結果、「都市の織り目」は、都市間のみならず都市と農村の境界を曖昧なものにしながら、その影響力を地球規模にまで広げているのだ、と。こうした一種の「予示的」な認識は、ルフェーヴルが生きていた時代よりも現代において顕在化している。これこそが、「プラネタリー・アーバンゼーション」によって、現代の都市状況を理論化しようと試みる論者たちの共通の確信である。

「都市への権利とその彼方」において、メリフィールドは、こうしたルフェーヴルの議論を踏まえ、「都市」を概念化することの困難を論じている。その困難の背景にあるものとして、本論文は、大きく3点を指摘する。第1に、「都市は産業の基盤を喪失したのであり、ルフェーヴルが述べるように、その結果として都市は自身の「大衆的な」生産拠点を喪失した」。つまり、生産からの乖離と金融化である。第2に、都市が地球規模に拡大したがゆえに、「農村」に代表されるような外部が失われたという事実である。そして第3に、中心／周縁の対立として都市を定義することの不可能性である。メリフィールドによれば、「これらの世界の分断線は、いかなる単純な都市—農村[の対立]によっても、いかなる南—北[の対立]によっても、定義されない」。以上を踏まえたうえで、論文の中心的な問いが提示される。その問いとはすなわち、都市の活動が地球規模の広がりを見せている状況のなかで、いかにかつてルフェーヴルが「市民権の革命的構想」として提起した「都市への権利」を考えることができるのか、である。そこでキー概念となるのが、「出会いencounter」や「モメントmoment」の概念である。これらの概念に立ち返ることで、メリフィールドは、「プラネタリー・アーバンゼーション」がもたらす不正義に順応するのではなく、その「**現実**に挑む」ものとして、「都市への権利」概念を練り直すことを試みている。

他方で、クリスチャン・シュミットとの共著論文「プラネタリー・アーバンゼーション」と単著論文「都市革命？」において、ブレナーは、シカゴ学派からグローバル・シティ論に至る都市社会学の認識論的系譜を辿りながら、そこに見られる（方法論的個人主義ならぬ）「方法論的都市中心主義」、すなわち境界画定された空間における人口変化に焦点を当てた

分析、そこから派生する領域類型に基づく研究アプローチ、都市の成長を限られた領域に限定する考察からの抜本的な転換を図る必要があると主張する。ブレナー自身が強調するように、そこで中心となるのは、「高密度の都市化」と「広範囲の都市化」の区分である。従来都市研究の領域で扱われてきた都市集積に関わる研究の重要性を繰り返し述べながらも、ブレナーは、後者の「広範囲の都市化」に関する研究の重要性を指摘する。それは、とりわけ都市研究の領域で「ブラック・ボックス」に置かれていた「後背地(hinterland)」へ波及する都市化の影響を分析対象に据えることで、地球に存在する様々な異質な空間の布置を形成する都市化の過程がいかなる性質を持つのかを明らかにしようとするものである。

おそらく、論文「都市革命？」で触れられているガス・レンツの写真とその被写体になったアルバータ州(カナダ)のオイルサンドの資源採掘場にみられるような地球上で現実に展開している「操作的景観(operational landscape)」は、ブレナーの問いかけの一つの契機になったであろうと推測される(ちなみに、昨年翻訳された気候変動に関するナオミ・クラインの著書『これがすべてを変える』(幾島幸子・荒井雅子訳、岩波書店)のなかでも著作の執筆動機として、この地が言及されている)。グローバル化による建造環境の変化についてはこれまでも多くの研究が蓄積されてきた一方で、こうしたグローバル化＝地球化そのものの巨大な推進力として都市化が捉えられることは稀であった。このように今日の複雑に変化する社会関係や空間関係を見通すプラネタリー・アーバンゼーションという視座は、都市化とグローバル化の相互に再帰的な関係を分析する理論的「ツール」となるように思われるのである。

謝辞

この解題を含む本特集は、公益財団法人村田学術振興財団研究助成「ポスト・アーバンイズム理論の構築—21世紀の複合的都市研究のために」(研究代表者：平田周)の研究成果の一部である。貴重な支援に感謝の意を捧げたい。

またルフェーヴルの論考の翻訳にあたって、仲介の労を取って下さったル・モンド・ディプロマティーク・ジャポンの村松恭平氏、論考の翻訳を快く許可して下さいましたニール・ブレナー氏とアンディ・メリーフィールド氏に、この場をかりて謝意を表明したい。